

工場の砂山から「数十年に一度の発見」

最古級含む銅鐸7点

南あわじ市の松帆地区で採取された砂の中から、弥生時代前期末、中期頭部(紀元前3〜2世紀)の銅鐸7個が見つかった。兵庫県と同一の両教育委員会が19日発表した。島根県の加茂岩倉銅鐸39個(国宝)や神戸市灘区の桜ヶ丘銅鐸14個(国宝)などに次ぐ多数の出土。少なくとも1個は全国でも1例しかない最古形で、状態は良好だった。初期の銅鐸を解明する「級史料」となる可能性が高く、研究者は数十年に一度の大発見と注目する。

(29面に関連記事)

南あわじ・松帆地区

見つかった銅鐸は、で見つかった。つり手(紐)断面が、銅鐸内部にのめられ、ひし形の「菱環鈕」で音を鳴らす青銅の式と、本体部分の面「舌」(振り子)3本筋に飾り板が付いた。も発見された。銅鐸と「外縁付鈕」式の2セットの出土は全国で高くは20〜30。う。貴重。入れ子状態の3組の個は、中に小組のうち、1組は発見型を入れてある「入れ」時に分離されており、子状態、残り1個今後、他の2組を「入れ」は、破損した状態。ピュター断層撮影

内部の振り子3本も



発見された銅鐸	型式	高さ	底幅	重さ	備考
1号	菱環鈕	26.6cm	15.5cm	1965g	舌がある
2号	外縁付鈕	22.4cm	12.8cm	1090g	舌がある、1号に入れ子
3号	外縁付鈕	31.5cm	17.5cm		
4号	外縁付鈕				3号に入れ子
5号	外縁付鈕	23.8cm			破損
6号	外縁付鈕	31.8cm	18.5cm		
7号	外縁付鈕				6号に入れ子



銅鐸(どうたく) 弥生時代の日本で作られた青銅器の一種。脱穀風景や稲を保管する高床式倉庫、シカ、イノシシなどの絵を描いたものもあり、豊作を祈る農耕祭祀(さいし)に使ったという説が有力。多くが集落から離れた山や谷に埋められているが、その理由はよく分かっていない。上部に「鈕(ちゆう)」と呼ばれるつり手が付き、当初は鳴らした「聞く銅鐸」だったが、次第に大型化して鳴らさなくなり「見る銅鐸」へ変化したと考えられている。時代が新しくなるほどつり手部分が薄くなることから、4時期に分けられている。



一括埋納されていたとみられる菱環鈕2式(左)など銅鐸7個と舌3本。外縁付鈕1式の2組(左から3、4個目)は入れ子状態=南あわじ市市民交流センター(撮影:中西幸大)

島根県の加茂岩倉遺跡出土の銅鐸と似たのがあり、同じ鑄造で作られた可能性もある。状態がよく、美的にも優れており、銅鐸自体の研究も進んでいる。

(C)「スキャン」で調べた銅鐸8個の出土記録だが、全てに手が残っている可能性がある。財があり、古津路で兵庫県の銅鐸出土数も銅鐸14本が出土。いは全国最多で、今回のだけでも作られた年代が発見で計68個(伝承記)近く、何らかの関係が録分を含むことになる。推測される。

銅鐸は4月8日、同連絡を受けた市教委が市内の玉砂利製造販売「調査」同23日までには社の従業員が選り別個を確認した。別作業中に見つけた。(田中真治)

「舌」伴う埋納淡路の特徴か
難波洋三 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
銅鐸7個、しかも「舌」を伴って見つかるのは非常に珍しい。音響的機能を保ったまま埋納するのは淡路の特徴かもしれず、埋納の意味や時期を考える上で興味深い。畿内中部では、地元勢が埋納の主体であったとも考えられる。

③ この記事を読んだ感想を書きましよう。

② 銅鐸7個と一緒に見つかった青銅の「舌」(振り子)は、どのようなものですか？文中の言葉を使って15字で答えなさい。

① このたび、南あわじ市の松帆地区で見つかった銅鐸は、2種類ありましたが、どのようなものが説明しなさい。

名前

」